1928 2028 th ANNIVERSARY
2026年10月1日
千葉商科大学記念誌
編纂だより
vol.04
〖 第4号 〗
ISSN 2760-1102
100年いきる良識を。
CUC 千葉商科大学

パンタライ

Tārta pēi

Chiba University of Commerce
Archives Newsletter

R. Endo



「新校舎落成式と体育祭・文化祭」1959(昭和34)年

瑞穂祭の前身となる学園祭は、1959年当時は「体育祭」「文化祭」として2日間にわたって実施されていた。特に同年は10月24日(土)に「新校舎落成式典」を挙行しており、同25日(日)に体育祭、26日(月)に文化祭を実施した記録が残されている。3日間の行事実施のため前後の23日(金)と27日(火)を臨時休校とした、5日間を通じた盛大な「祭り」であった。なお、同年の文化祭は実質的には音楽会であったようで、学生達の演奏による「演芸会」が開催された後、夜にはアルゼンチン・タンゴブームを巻き起こした大人気楽団「藤沢嵐子・早川真平とグラン・オルケスタ・ティピカ東京」の演奏会が開催された。

新制大学となって9年目の校地はいまだ木造の旧兵舎も残るキャンパスであったが、校舎を徐々に整えていくなかで華やかな音楽会を実施するなど、高度経済成長による岩戸景気の絶頂期とともに活況を迎えつつあった学内の様子が伺われる。



千葉商科大学を牽引した人々③
「河西 静夫」

河西静夫

1906（明治39）年12月1日－2003（平成15）年11月13日
千葉商科大学同窓会初代会長
巣鴨高等商業学校第二部2期生（昭和7年卒）

河西静夫は帝国ホテル代表取締役副社長などを務めた実業家である。その手腕を買われ、帝国ホテル以外にも複数のホテルや系列会社において取締役や監査役を務め、さらに社団法人日本ホテル協会常務理事として日本のホテル業界を牽引し、その発展に大きく寄与した。教育事業にも積極的に携わり、千葉商科大学同窓会初代会長として学校法人千葉学園評議員および同理事に就任、母校の発展に大いに貢献した。

巣鴨高等商業学校から帝国ホテルへ

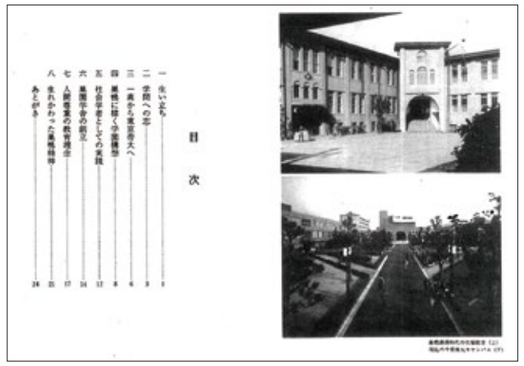
河西静夫は1906（明治39）年12月1日、山梨県に生まれた。旧制甲府中学校を卒業後、1929（昭和4）年4月に巣鴨高等商業学校へ入学、第二部（夜間部）2期生となった。なお、同年は巣鴨高等商業学校第一部（昼間部）も開校したので、第一部1期生も同時に入学している。当時の名簿を確認すると、第一部の1期生は80名超で2クラス、第二部の2期生は60名弱で1クラスの編成であった。第一部・第二部ともに修業年限は3年間とされた。「巣鴨高等学校規則」などに見られる学科目表によれば、第一部も第二部もほぼ同様の授業が行われたようで、授業時間は第一部が午前8時から午後3時まで、第二部が午後4時半から午後9時55分までと定められていた。ただし、授業料（学費）は第一部が年99円、第二部が年88円であった。

河西の在学期間中に起きた昭和恐慌によって日本社会は戦前期最大の経済不況に陥ったこともあり、家業の傾きや神経衰弱などを理由に退学する学生も後を絶たなかったが、河西は苦学のすえ、無事に1932（昭和7）年3月に巣鴨高等商業学校を卒業した。卒業後は1933（昭和8）年5月より株式会社帝国ホテルへ入社した。

入社当時は皿洗いなどの雑用中心であったものの、一心に働く姿が周囲の目に留まるようになり、やがて上長である石丸徹三から全幅の信頼を寄せられるようになったという。石丸が帝国ホテル社長となると、河西はその右腕としてますます能力を発揮し、副支配人、取締役、常務、専務、副社長と順調に累進した。それにともなって、ホテル業界全体の育成と発展に寄与した功績に対して多くの表彰を受けており、1978（昭和53）年には勲四等に叙し旭日小綬章を授与された。

一方、ホテル業界での努力が報われ成功を重ねていた間も、河西は絶えず母校とのつながりを持ち続けた。後述するように、同窓会初代会長を長年にわたり務めたほか、入学時より創設者である遠藤隆吉校長を心から尊敬していた河西は、1985（昭和60）年に『治道家遠藤先生を偲んで』を著している。同書のなかで在学中に見た遠藤校長について触れており、「当時の先生は巣鴨学園の拡充がようやくできて、高商を中心とする教育事業の実践に意欲を燃やしておられる時であった」（同書18ページ）「遠藤先生の建学の精神に導かれて、まだ自由主義の風潮ののこる社会で、楽しくのびのびと自己研鑽の道を歩みえたと思う。教授講師陣も東京帝大や東京商大をはじめ一流大学出身の権威者や新進学者が顔をそろえていたし、学校のサークル活動も盛んだった。スポーツでも“剣道の巣鴨”といえば全国の学生剣道界の覇者と目されたものだった」（同書19ページ）などと回顧している。





「治道家 遠藤先生を偲んで」1985（昭和60）年刊行

千葉商科大学同窓会初代会長として

千葉商科大学同窓会が発足したのは1970（昭和45）年11月のことであった。第1回総会において初代同窓会長に選出された河西は、同席上で挨拶を行った記録が残されている。翌1971（昭和46）年11月28日には千葉商科大学同窓会第2回総会（定期総会）が開かれ、その様子を巻頭記事として報じた『千葉商大同窓会報』第1号が、1972（昭和47）年10月25日に創刊発行された。

第2回定期総会において挨拶に立った河西は、「念願の会員名簿がご覧のとおりできあがりました。体裁、内容共に完全なものでは決してありませんが、この名簿は、必ずや会員相互の連絡、会の運営に役立つものでありましょう。否むしろ、この名簿は、千葉商大同窓会なる大きな建造物の土台であり、会発展の強固なる磁石となるに違いありません」と述べており、旧制新制の垣根を超え卒業年次を通じた初の同窓会名簿が完成したことを祝した。以降、定期的に同窓会名簿が発行されるようになった。



同窓会会員名簿　1975（昭和50）年版

河西は2000（平成12）年10月に同窓会創立30周年記念総会を迎えるまで同窓会長であり続けた。会長を含む同窓会役員は2年任期で、定期総会において役員選出を行う会則であるため、14回の再任を重ね15期にわたり同窓会長として母校のために尽力したわけである。

同窓会30周年を迎えた2000年の役員選出に際して静かに会長職を辞した河西は、すでに齢寿を迎える齢であった。会長職を辞するにあたり、河西は有価証券を千葉学園へ寄付している。「教育奨励支援金」とする名目で自身が所有する株式会社帝国ホテルの株券24万株をすべて寄付し、学園の発展に寄与することを望んだのであった。寄付にあたり、河西は2つの申し出事項を提示している。1つは株式を決して売却しないこと、もう1つは配当金のすべてを教育研究のために資することであった。

『河西静夫先生ご活躍の軌跡　―実業界、教育界における功績』刊行にあたり「序文」を寄せた千葉商科大学学長（当時）加藤寛は、このときの有価証券寄付のエピソードを紹介し、「この千葉商大に自分の夢を実現して欲しい。その夢とは、観光学科を作ることと、ビジネススクールを作ること」であるとおっしゃっていたと回顧している。河西はすでに立教大学に観光学部観光学科を設けることに協力し観光学の発展に尽力していたが、母校にも同様に観光学を導入し、ホテル業界全体の発展に母校の卒業生たちが寄与することを願っていたのである。さらに「ビジネススクール」というのは大学院拡充を想定していたという。その後、千葉商科大学では河西からの寄付の用途について協議が重ねられ、加藤学長のもと政策情報学部および大学院政策研究科博士課程を新設することとなり、河西の寄付は千葉商科大学全体の発展に大きな貢献をなした。

同窓会創立10周年に際して刊行された『千葉商科大学同窓会創立十周年記念誌』において河西は、「一度灰燼に帰した母校であっても、熾烈なまでに燃えさかる建学の精神は、今でも脈々として受け継がれております。この建学の精神を一つの精神的な支柱として、社会に貢献することは、我々同窓生の責務」であるとの言葉を寄せている。敗戦後に校地を移転し、廃校の危機を乗り越え新制大学として発展してきた母校に対し、河西は同寄稿において学内の融合調和を願い、「母校はこれから未来永劫、間断なく発展していくのです。併せて、同窓会も調和して歩み続けなければなりません」と結んでいる。

（浅沼薫奈　千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授
・遠藤隆吉研究所客員研究員）

コラム

明二義理一正二人情一。所二以学一レ為レ人也。

総合政策学部・教授　朽木　量

本稿は、漢文を含む原稿の特性を考慮し、縦組みで掲載しています。

表題に掲げた語句は、「義理を明らかにし、人情を正す。人として学ぶ所以（ゆえん）なり」と読む。遠藤隆吉先生の著作『巣鴨精神』の一節である。『巣鴨精神』は、「教育の要。人の大なるを知り人をしてその大なる所似を知らしむるにあり。また人に接するの第一義なり。」という遠藤先生の教育の理念に関わる言葉が巻頭に挙げられたり、「能力を外にして～」で始まる「建学の趣旨」が掲載されたりしている書籍で、遠藤先生の教育観や思想を理解する上で不可欠のものである。当該書籍の凡例にも「本書は先生の論作訓示中、本学園指導観念たるべきものを選択蒐集したるものである」と位置付けている。そして、この表題の語句は「教育の要」の次、「人文東洋主義」や「建学の趣旨」よりも前に掲げられている語句であるという点で、遠藤先生の教育にとって、「義理」と「人情」には人一倍思い入れが深かったであろうことがうかがわれる。

さて、この語句の意味であるが、「義理」という言葉の意味が変化してしまっている現代では、やや捉えにくくなっている。今の日本語では、「義理」というと、「義理チョコ」とか、「浮世の義理」のように、人間関係上の義務やしがらみ、人間関係から生じた恩返しの必要性などの意味にとらえられがちである。しかし、遠藤先生は東洋哲学に精通していたことを考え合わせると、中国思想の文脈での「義理」としても理解する必要があることも分かる。中国思想の文脈では、「義理」という語はまず「義」と「理」とに分けて考えると理解しやすい。即ち、「義」とは「人として正しいこと、利害を超えて守るべき道」を指し、「理」とは「物事を成り立たせている筋道、原理、秩序」を指している。したがって、「義理」は本来、「人間と社会、さらには世界を貫く正しい道理。あるいは世界を成り立たせている原理と人間の道徳とを貫く、あるべき筋道」という意味になる。その一方で、近世以来、日本では、中国由来の儒教的な「義理」が定着すると同時に、世間体、恩返し、対人関係上のしがらみを背景とする日本独自の義理観念が発達していた。それは「人情」と対になり、ときには個人の自然な感情を外側から拘束する社会的規範として理解されていた。『巣鴨精神』では「編集委員述」として、表題の語句に以下のような解説が加えられている。

> これを略解すると、義理のあるところはこれを明らかにせんとならぬ。恩義を忘れない。目前の都合のためになすべきことを廃さない。貧富権威を以て本末を換えない。皆義理を明らかにする所以だ。明らかにするは同時に之（これ）を行うのである。人情を正しくするは親疎（しんそ）の別を明らかにするのだ。己（おのれ）の子に悲しまないで、人の子に悲しむのは誤りだ。己れの親に尽くさずして、人の親に尽くすも誤りだ。己れの子を憂（うれ）えずして他人を憂うるのもまた誤りだ。人情が正しくないのだ。誤りをなす者は恐ろしい。一変すれば前に悲しんでやった人をも悪（にく）むことになる。前に憂えた人をも憂えなくなる。人情の正しくないものは即ち人間の中心を失ってしまえば既に人間ではない。かくの如きは先生の常に慨嘆（がいたん）せられる所だ。
>
> ※旧仮名遣いや旧字体、旧表記などは全て文意を損ねない範囲で筆者が現代的表記に改めた。以下同じ。

この解説文によれば、義理と人情を対比的に用いているので、世間体、恩返し、対人関係上のしがらみを背景とする日本独自の義理観念に基づいて解説されているとみるべきことが分かる。しかし、表題に掲げた「明二義理一正二人情一。所二以学一レ為レ人也。」の「義理」を対人関係上のしがらみというように狭義に限ってとらえることには違和感が残る。やはり、「義理」を「人間と社会、さらには世界を貫く正しい道理。あるいは世界を成り立たせている原理と人間の道徳とを貫く、あるべき筋道」と捉える方がしっくりとくる。即ち、世界の普遍的な原理と人間の道徳のあるべき筋道を明らかにすることは人情を正すことにつながり、人が学ぶ所以であると説いているのである。これは、遠藤先生の『道徳と品性』の冒頭、序文に「余平生（へいぜい）以為（おもえ）らく、学識と道徳と人物とは三者並びに必要欠くべからざるものなり」と述べている趣旨にもつながる。ちなみに、この序文では学識を「宇宙人生に対する見識」としたうえで、「如何すべきかというにただ修養によりて一種の情調に到達せんのみ」としている。「義理を明らかにして人情を正す」とは、まさにこの「宇宙人生に対する見識」と「あるべき道理、筋道」を明らかにすることで修養を積み、人情を正すとともに品性を高めて一種の情調に到達し、ひとかどの人物となることこそ学ぶ理由だとしていると考えられる。

さて、これまで遠藤先生の「明二義理一正二人情一。所二以学一レ為レ人也。」の言葉について縷々述べてきたが、今ほど、この語が必要とされる時代は無かろうと思われる。約束や信義は平然と破られ、自らの受けた恩を平然と仇で返すことが横行している。先に掲げたように、「人情を正しくするは親疎の別を明らかにする」ことにつながる。人の子より己の子、他人の親より己の親。自らに近い所から行いを改めて修養する。「誤りをなす者は恐ろしい。一変すれば前に悲しんでやった人をも悪（にく）むことになる。前に憂えた人をも憂えなくなる。人情の正しくないものは即ち人間の中心を失ってしまえば既に人間ではない」と、このように遠藤先生が慨嘆しておられたなら、信義が破られ、戦争やいさかいに明け暮れる現代社会を遠藤先生がご存命ならどのようにみられるであろうか。遠藤先生の創られた学園の伝統の一端を引き継ぐ、この千葉学園に関わる私たちだけでも、「義理を明らかにし、人情を正す」という学ぶことの意義を忘れずに行動できる人物でありつづけたいものである。

人文東洋主義

人文とは人間としての文章、即ち飾りであるから人間の行うべき道徳をいうのである。これはただ東洋が宜しいというのではない。第一に東洋の長所を認めどこ迄もこれを発揮する必要があるというのである。例えば長幼の序を重んずるなどということは西洋にはない。東洋特有のことである。而（しか）して東洋の美点であるから、これを発揮しなければならぬとするのである。第二に東洋人の心を正しくする意味からこれを主張する必要がある。西洋主義という心持が宜しくない。そうなると終（つい）には日本国家をも侮るようになる。科学的に見て善ければ西洋のものと雖（いえど）もこれを採らなければならない。今日の常識の如きは西洋的のものであるが、十分これを備えなければならぬ。余は西洋の知識を得る点に於いては最も熱心である。殊（こと）に最新知識ということに不断着目している。であるから東洋主義といっても何でも東洋が宜しいというのではない。道徳は東洋に長所があり、特色があるからこれを保持し、発揚しなければならぬ。その外のことに付いても東洋の美点はあくまでもこれを保持せよ、一概にこれを捨ててはならぬというのである。

コラム

『創立70周年記念誌』編纂を振り返って

― 大学創設期を中心として ―

千葉商科大学名誉教授
齊藤　壽彦

1.私は1997年に発行されました『創立70周年記念誌』の編纂を藤原昭夫先生などとともに担当しました。『50周年記念誌』の成果を継承しつつ、その後の学園の歩みや現状についての記述を付け加え、学園の今後の在るべき姿を描き出すことを基本方針としました。資料につきましては、戦災で巣鴨経済専門学校の校舎が消失し、いざというときは掘っていた穴に重要書類を入れて逃げるということになっていたのに当直の先生が重要書類を入れないで逃げてしまい、最も重要な書類が預けていた中学校に残るだけとなっていました。また、戦後の混乱期が長く続いたため、学園の歴史を直裁に物語る資料が極度に不足していました。統計等につきましても収集が困難でした。

そこで、私たちは本格的な大学史編纂は今後に委ねることにして、座談会と4つのインタビューを重視し、学園経営の苦心談や学園の未来像について原田嘉中理事長、加藤寛学長、東条吉彦常務理事・事務局長、黒田直竹・加藤喜蔵名誉教授に自由に語っていただきました。また教職員、退職された教職員、および卒業生の方々にも原稿をお寄せいただきました。こうして激動の時代を懸命に生き抜いてきた学園関係者の息吹の一端を読者に伝えることといたしました。

2.極めてスケールの大きな社会学者、哲学者、教育者である遠藤隆吉によって1928年に財団法人巣鴨学園のもとに創設された巣鴨高等商業学校が1944年に巣鴨経済専門学校と改称された後、同専門学校が1950年に千葉商科大学に昇格しました。商大は遠藤隆吉が唱えた建学の精神(「建学の趣旨」)を受け継いでいます。妹が遠藤隆吉の長男の健吉先生と結婚していて、巣鴨中学、巣鴨高商の先生であり、巣鴨経専校長代理ともなった黒田先生から遠藤隆吉のことをよく知ることができました。巣鴨経済専門学校では他の専門学校と違い、実学とともに倫理学などの教養科目も教えていました。世の中の根本は、草がすくすくと育っていくように「生々」にあると遠藤隆吉は語っていたとのことです。

巣鴨高商の教育理念は「硬教育」にありましたが、これについては黒田先生から詳しく知ることはできませんでした。「硬教育」については、戦後、巣鴨中学・高等学校が、教える側が「わかりやすさ」を追求するのではなく、学ぶ側が、わかりにくいものでも自らの努力によって理解するという、学ぶ側主体の教育理念、努力主義としてとらえています。

3.黒田先生、加藤喜蔵先生、原田理事長、東条事務局長の話から千葉商大創設の事情がかなり明らかとなりました。遠藤隆吉は1910年に私塾として設立し、1922年に私立学校巣鴨中学を設立した「巣園学舎」と、1928年に設立した巣鴨高等商業の経営母体である「巣鴨学園」の両財団法人を巣鴨で経営していました。1948年に、旧軍用施設を私立学校の教育施設に優先的に払い下げるという措置が採られ、国府台の野戦重砲兵第17連隊の跡地が和洋女子専門学校、東京医科歯科大学、日本医科大学、巣鴨経済専門学校等に割り当てられます。空襲(1945年3月10日の東京大空襲ではなく4月13日の空襲)による校舎消失のため、津田沼に一時移転していた巣鴨経済専門学校は1947年9月に国府台の軍用地(1946年5月に借入使用許可)に再移転しますが、経営していた巣鴨学園は当時財産がほとんどなく、「私立学校建物戦災復旧貸付金」を借り入れつつ1万4000坪ほどの土地の払い下げを受けています。

戦後、戦災(巣鴨中学も戦災を受けています)と1946年2月の遠藤隆吉の死去のために巣園学舎と巣鴨学園の双方の経営の維持が困難となった遠藤家(遠藤なつ婦人と長男で巣鴨中学校長の遠藤健吉氏)は、学校の存続を



千葉商科大学名誉教授
齊藤　壽彦(さいとう ひさひこ)

略歴:1974年千葉商科大学着任。
経済研究所長、図書館長、商経学部長、理事等を歴任
2016年より名誉教授。
専門は金融論、日本金融史。

希望し、巣鴨経済専門学校の経営を遠藤なつ婦人の知人である森志久馬氏に託することにしました。森志久馬氏が巣鴨学園の経営権を買い取ったわけではありません。1948年から巣鴨学園の経営に携わった森氏は前述の「貸付金」借入等に尽力しています。

戦後、旧制の専門学校は新制の高等学校に、格下げになるか新生大学に昇格するか、選択を迫られることになります。1951年に成立した短期大学制度の下で、短期大学に移行する道もありましたが、それでは伝統ある巣鴨高商がなくなることになります。遠藤家では巣鴨経済専門学校の経営を他の者に託することとしましたが、この場合、巣鴨経済専門学校を大学に昇格させることを絶対的な条件としました。

しかしこの昇格は大学の設置基準を満たさなければならず、当時の資金難の下で大きな困難と苦労を伴うものでした。新制大学制度は1949年にスタートしましたから1948年に千葉経済大学の名称で大学への設置認可申請がなされましたが、これは不適格となりました。その決定的な理由は蔵書の不足でした。

その後、1948年に入学した東条吉彦氏を始めとする在学生が募金運動をしました。同級生や保証人に1人につき当時のお金で1000円の募金をお願いしています。お金を出せないものは本でも寄付を受け付けています。当時の学生は学生大会で寄贈の決議をしています。当時の学生は専門学校が1955年で廃止になるのは困ったということで必死でした。当時、図書課長であった柳井先生を始めとする先生方も自分の家の本を学校に持って行っています。それにラベルを貼ったものがありましたが、ラベルを貼らなかったものが多数ありました。当時の大学審査委員はそのことを黙認していました。

1949年に千葉商科大学の名称で大学昇格を再申請しました。森、黒田、柳井、それに吹田先生の4人は予約なしで大学昇格の審査委員の家を夜訪問して、「どうぞよろしく」と頼んで歩いたそうです。今では考えられないことですが。大学の名称を千葉商科大学とした一因として、戦時中に国によって巣鴨高商が巣鴨経専に名称変更させられていたため、伝統ある高商を受け継ぐものとしたことが考えられます。

津田沼にあった土地は遠藤隆吉が買っていたもので、7万坪もありましたが、戦後の農地改革のために、遠藤家が不在地主ということで、また戦後インフレもあり、事実上ほとんど没収されています。

このような経過を経て、1950年3月14日に千葉商科大学の設置認可が承認されます。

1949年12月に「私立学校法」が制定されて私立学校の設置者は学校法人でなければならなくなりました。その法律の施行にしたがいまして、従来の財団法人巣鴨学園は学校法人千葉学園となりました。学校法人巣鴨学園とならなかったのは大学の存在する地名を考慮したためです。学校法人巣鴨学園の名称は、1956年になって、遠藤家が経営の任に当たってきた、学校法人となった巣園学舎の名称に代わって用いられることとなります。

本学は1、2学年同時募集が認められましたが、大学に昇格した当時、2年生は7名しかいませんでした。経専から商大の2年生に編入した原田理事長はバケツを下げて生徒募集のポスターを貼って歩いたそうです。

発足当時の施設は、お粗末極まりないというものでした。

創立当時の状況が『創立70周年記念誌』編纂過程でこのようにわかってきました。

(続)

記念誌分科会 活動記録（2026年4月～2026年9月）

2026年4月	記念誌編纂だより「パンタライ」第3号発刊	8月	新聞部部室所蔵品を受領（瑞穂新聞等）
	第12回記念誌分科会		デジタル化資料納品（森志久馬学長　葬儀映像等）
	室課所蔵品を受領（航空写真等）		室課所蔵品を受領（加藤寛学長　肖像写真等）
	1999年卒業生より寄贈資料受領		関係者インタビューに向けて準備開始
5月	1971年卒業生より寄贈資料受領		学生課地下倉庫より、歴代学園祭パンフレットを借用
6月	2005年卒業生より寄贈資料受領		解体工事中の倉庫（旧斯心寮）門柱看板を収蔵
	記念誌分科会責任者交代（磯山友幸教授から朽木量教授へ）		次回企画展に向けて、テーマ考察、打合せ
7月	1998年卒業生より寄贈資料受領	9月	次回企画展に向けて、資料打合せ
	パンタライ第4号の台割について打合せ		1970年卒業生より寄贈資料受領
	関係者（名誉教授）への寄稿依頼		1992年卒業生より寄贈資料受領

資料寄贈のお願い

本学の100年の歩みを振り返る上で、卒業生の皆様がお持ちの資料は重要な記録・手がかりとなります。
お持ちの資料をご寄贈いただける方は、下記の申込み・問合せ先までご連絡ください。

【情報・資料などの例】

卒業証書、入学手続きの記録、大学から送られた書類、大学で使用した教科書やノート、日記、写真、研修旅行・ゼミナール合宿の記録、学生寮関係資料、部活動・サークル活動関係資料など

＊原本を寄贈ください。原則として返却はできかねます。

【申込み・問合せ先】

右の「お問い合わせフォーム」よりお問い合わせください。

＊お問い合わせの際は、資料の内容（名称・分量等）をお知らせください。

＊内容を確認の上、係よりご寄贈方法などについてご相談させていただきます。

（保管スペースの都合上、資料の受入れをお断りする場合もございます。ご了承ください。）

お問い合わせフォーム

スマートフォン用二次元コード　PC用二次元コード

千葉商科大学記念誌編纂だより　第4号



【Πάντα ῥεῖ（パンタライ）の由来について】

古代ギリシャ語の「Πάντα ῥεῖ（パンタライ）」は、ヘラクレイトスの言葉「万物は流転する」であり、生々示碑の最上部に掲げられている。「第一に万物は生々流転するがゆえに測り知ることは出来ないため万物を畏敬するべきであること、第二に人間も同様に測り知ることは出来ないので平等に扱うべきこと、第三に人間は生々発展することを希望しているのでそれを助けるべきこと」の三つを綱領とした遠藤隆吉の生々主義哲学を象徴する言葉である。編纂だよりの表面に記されたこの文字は、生々示碑から拓本により写し取った遠藤自筆の文字である。

発行日：2026年10月1日
編　集：千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会　記念誌分科会
印　刷：㈱アド・プラネット
発　行：学校法人千葉学園　千葉商科大学
総務課史料編纂係

〒272-8512 千葉県市川市国府台1-3-1
TEL：047-373-9774（平日9:00-17:00）
創立100周年特設Webサイト URL：https://www.cuc.ac.jp/100th/

記念誌分科会のうごき

2026年度上半期も同窓生の皆さまを中心に多数のご寄贈をいただきました。記念誌分科会では受領した貴重な資料や寄せられた情報をもとに、記念誌編纂や企画展開催を進めております。100周年へ向け、引き続き皆さまのご協力をお願いする次第です。在学当時の想い出話などもお聞かせください。

さて、今年度受領した資料のなかに会計学研究部々誌『瑞穂』がありました。『瑞穂』は年1回の発行で、寄贈されたのはNo.2（昭和42年）からNo.15（昭和55年）でした。当時の学生たちによる部活動の様子などがわかる大変貴重な資料でした。寄贈者からは創部からの歩みと概要をご教示いただきましたが、廃部までの詳細はいまだ不明です。会計学研究部や冊子『瑞穂』について何かご存じの方は情報をお寄せいただけますと幸いです。

なお、2025年度中にご寄贈いただいた資料は一部入れ替えのうえ、The University HUB（旧・瑞穂会館）1階MUSEUMにて引き続き公開中です。来校の際はぜひご見学ください。

